

大正天皇御集

水上瀧太郎全集

三卷

昭和十六年八月二十五日印刷  
昭和十六年八月三十日發行

水上瀧太郎全集 三卷

會費參圓

著者 阿部章藏

發行者 岩波茂雄

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(33)一八七番  
振替口座東京七四四一六番  
會員番號一〇二〇三七番

配給元

東京市神田區  
淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

精興社印刷 板倉製本

## 目次

落葉の頃	一
紐育——リヴァプール	元
大空の下	九
友情	一七五
秋	二九
正月	二五九
祭の日	三五五

水夫の家	三五
隣室の犬	三八一
辻君	四〇九
失職	四三一
葡萄酒	四六七
虫の命	四八三
雲	五〇三
師表	五三五
喧嘩	五六七
邂逅	五九一

九月一日 . . . . . 六元

後記 . . . . . 一

落葉の頃





その日、午後の散歩から歸つて來ると、往來に面した家の入口の段々に、リリアンは一人うら寂しく腰掛けて居た。

「ハロオ、リリイ。」

「ハロオ、オホキ。」

くるくるした眞青な目のふちに微笑を湛へて彼女は應へた。

「何處どこにいらつしやつたの。」

「散歩。」

大樹おほきは答へながら、リリアンと並んで腰を下した。此頃は兎角氣分が勝すぐれないで、少しばかりの散歩にも彼は疲れてしまふのであつた。

「くたびれた？」

リリアンは覗き込んで訊いた。

「どうも此の頃は變だ。神経衰弱かしら。」

「あんまり本ばかり讀んでるからでしょ。夜遅くまで。」

大人らしくたしなめるやうな口ぶりで云ひながら眉をひそめた。

目の前の芝生は一條貫く小道を縁取つて蒔いた鳳仙花の、夏の間は白いのも紅いのも淡紅色のも、咲いては散り咲いては散り、あきあきする程咲いたのも、延びるがままに延びた根元から枯葉を見せ、衰れに汚れて散り遅れた花は、からからに乾いて莖にこびり着いて居る。隣家との境界に茂るライラツクの垣根に近く、暑い盛りには咲亂れた天竺牡丹、松葉菊、雛菊、夏薔薇、貝殼草、金仙花、百日草などの、目に痛い程強烈な色彩を競つたのも、花の形は日毎々々ちひさく、今は見るかげもなくなつてしまつた。就中丈高く大きな花の、日輪を反射する迄光り輝いた向日葵は、此の頃の風にいたんで、倒れた莖はまだなまなましいが、僅かばかり葉うらに残つた瘦せた花もうなだれ勝ちに、少しばかりの風にさへ心もとなく揺れるのである。

何處かで弾く洋琴が鈍く微かに聽えて來た。リリアンはそれに合せて、音には出ぬ程軽く口笛を吹きながら、靴の踵をことこといはせて居た。

日ざしも弱々しく傾いて行く夕暮前の、並木の楡の梢を透いて遙かに高い空を見詰めて居ると、その高い空を横切つて渡鳥の群が通る。一羽、二羽、三羽、四羽、五羽、六羽——七羽——八羽

まで數へた時、列が亂れて數へ切れなくなつた。群つて西の空へ流れるやうに飛んで行く無數の鳥の、親も子も、兄弟も姉妹も、友達も入りまじつた景色が懐しくて、何處迄もと見送つたが、その一群の小鳥は、見る間に遠く高い大空に吸込まれるやうに消えてしまつた。餘り一心に見送つた爲めか、涼しい風の沁みる氣持のする目には、時にふと故郷の父母を思ふ時のやうに、何時か涙さへ滲みかねなかつた。

「左様なら、キテイ。」

突然頭の上で冴え冴えした聲が聞えた。大樹は驚いて振仰いで二階の窓を見た。

「御機嫌よう。」

と同じ聲が続いて叫んだ。長い間誰も入つて居なかつた其の室に、聞き馴れない聲を聞いたのだ。それは若い女の鋭い聲のやうにも想はれた。老人の濁つた聲のやうにも想はれた。

「誰？」

「鸚鵡よ。」

リリアンは大樹の驚きを悦ぶ顔つきでささやいた。

「鸚鵡？」

「今日から貴方のお隣室に年寄の方がいらつしやつたの。その方の鸚鵡でね、桃色の、それは可愛つたらないの。」

リリアンはさも可愛らしくて堪らないといふやうに目を細くして、得意になつて話した。

「リリイ、——リリイ。」

家の内——厨の方で娘を呼ぶ母の聲がした。

「リリイ。」

「ハイ、只今。」

娘は答へながら勢ひよく立上つて、短い袴の下から、すんなりした脚を見せて階段を馳上ると、おさげの髪を波打たせながら家の内に引込んでしまつた。

「左様なら。」

鸚鵡の聲は暮れかかる夕方の空に反響するまで響いて聞えた。

そのむかしメイ・フラワア號に乗つて、英本國から移住して來た清教徒を祖先とする新英蘭土の、物堅い保守的な精神を今も傳へる此の土地には、一の劇場も無く、酒を賣る事は嚴禁してあつた。それは旅人にとつては随分寂しいものであつたが、傳統のある土地に限る人の心の濫さは、

時にふと堪へ難く心を襲ふ異郷の愁ひをさへ、かへつてなつかしく思はせもするのであつた。其處いらの家はしもたやが多く、教授、軍人、役人などの隠居したのや、夫に別れた母子、又は此の地方の名物と云はれる老嬢オールドミスといつた風の人々が住んだ。さうして、かなり有福な家でも空間があれば學生に貸すのがおきまりだつた。

ハンコツクの家も主人が死んで、母親と娘が、僅かな遺産に頼つて暮さなければならなくなつてから、同居人の叔母——亡き主人の妹——の他に、何時でも二三人の學生に室貸まがしをして家計を助ける事になつた。

遠い故郷に別れて、土地馴れぬ旅人の身の心細さを思ひ知りながら、大樹が此の家の二階の一室に旅靴を下したおろのは、今年の春裏庭の果樹園に林檎の花の雪よりも白い頃であつた。

故國に居れば人並よりは少し大柄な方なのだが、此の國に來ては到底くら比べものにならないばかりか、日本人に特有の扁平な顔つきが、見馴れない人々には、どうしても少年こどもらしく映るのであつた。且大學の聽講生として毎日講堂へ通つて行くのだと知つてからでも、母親もリリアンも、彼を大人扱ひには出來にくかつた。それには不自由な英語の會話のたどしきも、一層こどもこどもして見えたに違ひなかつた。人のいゝ母親は、黄色い顔つきの、みすばらしい異國の青年

を見ると、その風采の悪い事さへ、いかにも頼り無い身の上らしく想はれて同情された。

「日本て随分遠いんだらうねえ。」

或時母親はしみじみした調子で娘に訊いた。

「エエ太平洋の向ふよ。」

娘は學校で地理を習つた時に、地圖をさし示す先生の鞭のさきに、ちひさい赤い鳥を見た事を思ひ出して答へたが、母親にはただ青々とした波濤のうねる海洋の景色の他には何も想像する事が出来なかつた。さうしてそれが一層母親をして日本の青年をあはれがらせる事になつた。

毎日々々大樹は學校の講堂と圖書館に通つた。家に歸つても多くは机にむかつて、夜の更ける迄本を讀んだ。夏が來て、裏二階にゐた二人の學生は卒業して各々故郷に歸つてしまつたが、大樹は一人居残つて、酷しい眞夏の間も、全身汗に濡れながら机にむかつてゐた。歸るべき彼の父母の家は餘りに遠い海の向ふだつた。

彼は此の三月の暑中休暇を利用して、みつちり勉強しようと思つてゐたのだが、想像にも増した暑氣に、元來寒さに強いかはりに、毎年夏は肉體から悄氣てしまふ彼には堪へ難いものであつた。窓に近い路傍の榆の梢の茂りに薄暗い室の中に閉籠つて、日毎机に向ふにはむかふのだつた。

が、襦袢一枚になつてぢつとして居ても、全身から滲み出る汗に疲れて、折角開いた本の上に、何時か額を押しつけて居眠つてしまふ事が多かつた。

いとど長く想はれたその一夏、大樹はハンコツクの家と共に出秋を待ちあぐんだ。

「秋になつて學校が始まつたら、又二階の室はふさがらうか。」

と乏しい生活を心配して咳く母親には、殊更待たれる秋であつた。

新學期が始まつても、空いたままの室は空いたままに残つて母親のおもひになつた。露に脆い並木の樹木の葉は何時の間にか黄ばんで、風も無いのに敷石の上に落ち始めた。その折柄思ひもかけ無い老人が、表二階の一室——大樹の隣室を借りた事は、餘りに平調な日ばかり續いた一家の者の心に、軽い好奇心を起させた。

翌朝、大樹はいつもの通り學校の食堂に朝食を認めに行かうと思ひながら梯子段を下りて行く時、階下の客間の入口に主婦と立話をしてゐる老人を見た。

「ミスタア・オホキ。」

軽く會釋して通り過ぎて、そのまま扉の外に出ようとした彼の後から、宿の主婦は呼止めた。

「御紹介ませう。」

呼止めた大樹の肩に手を置きながら、

「これは私のもう一人の子供です。勉強家で、親切で、正直で……」

人のいい主婦は、何時も此の青年を他人に紹介する時にいふ冗談を繰返した。

「オオ貴方は日本の學生ですね。」

老人は噎れた聲で云ひながら、珍しさうに大樹の手を握つて振つた。大兵肥満の老紳士の、純白の髯に覆はれた顔には柔和な微笑が浮んで居た。

「いづれゆつくり東洋のお話でも聞かせて貰ひませう。」

と云ふ言葉を後に聞いて大樹は戶外に出た。秋の朝の眞青な空の日輪は、並木の樹木の高い梢の黄葉にまばゆいばかり光り輝いてゐた。時折過る風に連れて、行人にふりかかる木の葉を浴びながら雑木林を抜けて學校へ急ぐ彼は上品な老人の顔を忘れ難く思つた。

時たまの散歩の外は、講堂と圖書館に一日を過してしまふ大樹は、同じ家に住んでゐながら、隣室の老人の顔を見ないで暮らす日の方が多かつた。夕方宿に歸つても、隣室には人の氣配も無く、籠の鸚鵡の羽ばたきと、金網を嘴でことこといはせる音が、壁の向ふに聞えるばかりであつた。それも夜が更けて、大樹が床に入る頃は、桃色の翹を持つといふその鳥も樅木に眠るのであ



らう、ひつそりとして家の内には一切の音響が息をひそめてしまふ。

けれども曉<sup>あけ</sup>方目を覺ますと、東の窓から射<sup>す</sup>込む朝日を浴びて、勢ひよく叫ぶ鸚鵡の聲が、枕に近く聞えるのであつた。何時の間に覺えてしまつたのか、

「リリイ——リリイ。」

と二度重ねて、二度目を少し引張つて娘を呼ぶ宿の主婦の聲を、憎らしい程巧妙に眞似する事もあつた。

「リリイ——リリイ。」

と抑揚をつけて、返事の無いのを小じれつたさうに鳥は屢々叫ぶのであつた。

「ハア、只今。」

最初のうちは、ほんとに母が呼んでゐるのだと思つて、屋根裏の小部屋に寝てゐるリアンは、狼<sup>あわ</sup>狽<sup>た</sup>しく梯子段を馳<sup>かけ</sup>下りて來たものであつた。

「ママ憎らしい。お母さんの眞似なんかして。」

隣室の戸口でリアンの笑ひ聲につゞいて、その室内で、

「他人<sup>ひと</sup>様の迷惑になるやうな事を云つてはいけないよ。」